うんとイイトコ南相馬 Season４
成果報告書

2021 年 3 月 15 日

福島大学学生団体
代表者　高田　優花
執筆者　倉上蓮汰

1.　はじめに

私達、「福島大学学生団体うんとイイトコ南相馬 Season４」は、東日本大震災によって被災した南相馬市の復興、再生の様子を観察しながらこれらに少しでも寄与したいという想いから発足した。構成員は全員、昨年度の授業「むらの大学」で被災地への知見を深めた福島大学生であり、より高度な次元で継続的に南相馬市の復興に関わりたいという想いのもと「うんとイイトコ南相馬 Season４」の活動に参加した。震災から 10 年を迎えた今、また新型コロナウイルス感染症の流行で更なる危機に瀕している今、私達学生に何ができるのか、何を考え、想い、行動したのか、ここに記して成果報告としたいと思う。

2.　活動の目的

活動の主な目的は、昨年度「むらの大学」で課題として挙がった**「市内外への南相馬市の魅力のさらなる発信」**と、**「震災や昨今の新型コロナウイルス感染症の影響で失われつつある住民のコミュニティー、特に子どもや高齢者のコミュニティーの再建」**の２つである。これらを目的とする活動を行うことで、南相馬市への観光客や関係人口の増加、市民による市の魅力の再発見、地域コミュニティーの活性化などの効果が期待される。

3.　活動内容

活動内容は、大きく分けて以下の二つである。

一つ目は、「震災から 10 年が経とうとしている今、南相馬市の住人は何を思うのか。今後どうなって欲しいのか」をテーマに住民の方々へ質問し、住民の方々の生の声を集め、市内外へ発信する活動である。

この活動は 8 月にグループを組み始動した。活動開始当初は、震災から 9 年が経ったことに加えて新型コロナウイルス感染症の拡大によって新たな課題が発現しているであろう南相馬市の抱える課題を推測し、南相馬市の飲食店の魅力を特に市外に対して発信しようという計画を立てた。方法としては、南相馬市の特に小高区における飲食店の観光マップを作成し、配布するというものであった。しかし、10 月に実際に南相馬市に足を運び住民の方々の意見などを聞き取り調査した結果、上記のような飲食店の魅力発信も重要な課題ではあるが、それ以上に重要な課題を発見した。それは、南相馬市の現状をそこに住む人々はどう評価し、今後どうなって欲しいのかということを知り、発信する必要があるということである。その理由としては、南相馬の住民の方々にお話を伺っているうちに「新型コロナウイルス感染症の流行や震災から 10 年という今だからこそ、南相馬に住む人が南相馬の魅力を再確認する必要があるのではないか」と考えるようになったからである。同時に、魅力を南相馬の内側だけでなく外にも発信することで震災やその他影響によって南相馬から出ていってしまった人が南相馬の魅力の再確認をし、南相馬に戻ってくるきっかけとなることができるのではないかと考えた。ここでテーマを「南相馬の魅力の再確認」と設定し、魅力の再確認をするにあたってその事前段階である住民の方々の南相馬の現状の評価と今後どうなっていって欲しいのかという事柄を調査することとした。

調査を始めるにあたり、調査範囲を南相馬市の小高区に絞り、調査方法は住民の方々へのインタビューという形式をとることとした。また、南相馬市現地での調査時期が 12 月であり小高区では「あかりのファンタジーイルミネーション in おだか」が開催され街中がイルミネーションで綺麗にライトアップされていた。そのため、その雰囲気に合うように住民の方々に装飾品を模した画用紙へ現在の暮らしの評価と今後の要望を記入して頂き、それをクリスマスツリー型のタペストリーに貼り付け、福島大学学内や南相馬市内の施設に掲示するということとした。住民の方々にインタビューをしつつ直筆で評価と要望を書いていただいた理由としては、この活動の大きなテーマである住民の生の声を届けるということに重点を置き、直筆であることでより住民の方々の意見が強く届くのではないかと

考えたからである。下の画像が実際に書いていただいたものの一部である。大人の方には評価と要望を書いていただき、子供達には自由に絵を書いてもらった。評価と要望の内容やそれに対する考察は次章で行う。

大人の方に書いていただいたもの	子供達に書いてもらった絵

これらの装飾品をクリスマスツリー型のタペストリーに貼り付け、福島大学内や南相馬市に掲示し、今現在の南相馬市の住民の方々の生の声を市内外に発信しようとしていた。だが、新型コロナウイルス感染症の影響で大学はオンライン授業になり、サークル・クラブ等活動が禁止されたことで掲示が難しくなってしまった。そのため、今年度の活動は意見の収集と分析までとし、市内外における発信については来年度、十分に効果のある掲示が可能になった時点で活動を再開する予定である。

二つ目の活動は、「新型コロナウイルス感染症の影響を受けにくい観光促進企画として地域の絶景を広く知ってもらうこと」を目的として行われた活動である。この活動では、SNS や郵便を使用して南相馬市をテーマにした写真を集め、その中から 12 枚を選定し 2021 年の南相馬市カレンダーを作成した。その際、写真の選定方法として地域住民 6 枚、主催者 6 枚ずつ選定することとした。まず、この活動を市民の人々に認知してもらうために写真コンテストを行うことを周知するポスターを作成した。

その後このポスターを持って南相馬市へ足を運び、交渉して許可を頂いたら掲示させていただくという形でポスターの掲示を進めた。

・ポスターを掲示した場所

小高駅、双葉屋旅館、小高交流センター、浮舟文化会館、フレスコキクチ、道の駅南相馬、南相馬復興大学、HANGAI SHOTEN、はらまちユッサ、ジャスモール、MAX 福島、福島駅、餃子の照井、万葉ふれあいセンター、原町生涯学習センター、鹿島生涯学習センター、福島県立相馬高等学校、小高ワーカーズベース、南相馬自動車学校、福島県立原町高等学校、ゆめはっと、フレスコキクチ北町店、福島大学 学生課、福島大学 教務課、金谷川駅、福島県庁

ポスターを掲示して約一か月で SNS や郵便で約 500 枚もの写真が集まった。その写真の中からどの写真をカレンダーに載せて欲しいか約 200 名の住民の方々を対象にアンケートを実施し、カレンダーに掲載する写真を選定した。

←作成したポスター

アンケート調査の様子

アンケート調査の様子

上記の方法で選定した写真をもとにカレンダーを作成し、配布した。

・カレンダー配布先
　へうげもの(15 部)
　南相馬市立中央図書館(12 部)
　双葉屋旅館(13 部)
　その他カレンダー写真当選者と、ポスター・チラシ設置場所(25 ヶ所)にも送付

新型コロナウイルス感染症の影響で未だに南相馬市の地域住民へのカレンダー配布は実施できていないが、今後の状況次第では南相馬市内で配布することも視野に入れている。

（実際のカレンダーの写真）

4.　活動に対する考察

ここでは２つの活動を通しての考察を述べる。

まずは１つ目の活動で収集した、住民の方々の声についての考察である。１つ目の活動では「今後どのような小高になって欲しいか」「今の小高の好きなところはどこか」といった内容の質問を住民の方々に実施した。住民の方々からの声として一番多かったことは、「南相馬市に若い人達が来て欲しい」ということと「南相馬市で若い人達が活躍できるような環境を整えて欲しい」という声であった。どちらも若い人達についてのことであり、住民の方々は若い力に期待し、若い人々こそが南相馬市の発展のカギを握っていると感じているという結果となった。

その次に多かった意見は「戻れないことはわかっているが、震災以前の南相馬市に戻って欲しい」という内容のものであった。その他にも様々な意見があったが、今回はこれら２つに絞って考察をしていく。

まず住民の方々が今後の南相馬市、特に小高区の発展のために若い人達へ期待を抱いているという点について、その背景には人口増加への期待と、特に震災・原発事故による避難の結果、一気に高齢化が進んだ現状への危機感があると考えられる。若い人達が南相馬に来て欲しいという意見と共に、人口が増えて欲しい、元に戻って欲しいという声も多く聞かれた。若い人達の力で南相馬に活気を取り戻し、その結果として南相馬を離れた人や南相馬に関心のなかった人々が関心を持ち、南相馬に関係する人口を増やしたい……という理想的なサイクルが、少なくない住民の間で共有されていると推定される。若い世代の人口増加を積極的に支援する施策には、単にその世代のみでなく、広い世代の住民にとってメリットがあると考えられている様子が、今回の活動を通じて明らかになった。

次に、震災以前に戻って欲しいという現状の評価について考察していきたいと思う。震災以前に戻って欲しいと話す住民は、皆口々に「戻れないことはわかっているが」という言葉を頭に付ける。南相馬市では様々な企業を誘致したり、ソーラーパネルによる土地利

用を進めたりなど、積極的な開発を進めている。確かに、震災前の姿に戻ることは非現実的であり難しい。しかし、だからといって以前の南相馬の面影も残さずに開発を進めることは住民の方々は望んではいないのではないか、そのような思いが、住民の方々の「以前のように戻って欲しい」という言葉に表れているのではないか、というのが、今回の調査を経て私たちが得た一つの推論である。

今回の調査で、若い人達によって活気と人を取り戻して欲しいという想いの反面、以前の南相馬のような落ち着きや雰囲気を望む人々が多くいると分かった。これら２つは一見矛盾するかのように見えるが、必ずしも共存が不可能なわけではない。若者が活躍できる基盤整備を行ったうえで、できる限り多くの世代を巻き込み、以前の南相馬の雰囲気を残した形での地域発展を目指すことが、今後求められるのではないかと考える。

２つ目のカレンダー作成の活動では、集まった写真に野馬追関係の写真が多かったことが特徴的であった。このことは南相馬の人々がそれだけ野馬追という行事を大切に思っていることのあらわれであると考える。野馬追という素晴らしい行事を市外へどう発信していくのかは、今後も継続して考察されるべきテーマである。

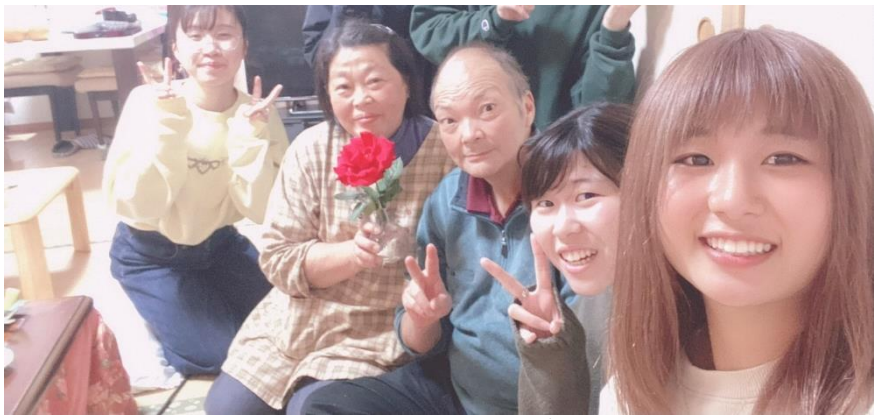
また、野馬追以外の風景や草花についての写真も多く寄せられた。きれいな風景や草花にも、ここ南相馬ならではの魅力が溢れているが、その素晴らしさに気付いていない人が多く存在している。そうした魅力を市民が再確認し、また市外までその魅力を届かせることで、今後、南相馬に関わりたいという人を増やしたり、南相馬から出ていく人々を減らしたりすることが可能なのではないかと考えられる。

5.　活動に対する学生の意見や感想

以下では、活動を通して感じた学生の意見や感想を紹介したい。

まず挙がったのは、コロナ禍が終息したらどんどんイベントを開催し、若者を増やすことが必要だという意見である。イベントも単発的なものではなく継続して行い野馬追に対抗できるような大きなイベントを作り上げたいというものであった。また、避難者へのアプローチの必要性を感じている者もいた。避難者が南相馬に戻ってきやすいような環境を整えたり、現状を伝えたりすることで南相馬との繋がりを切らない工夫をすべきであると考えた学生もいた。同じように、南相馬から若者が出ていかないような工夫や南相馬にいたいと思えるような環境作りも必要であると考えている学生もいた。その他にも、イベント開催やワークショップ開催を行うために行政や我々第三者が手助けし、住民が主体的に南相馬をよりよくしようという行動に関わることが必要であると考えた学生もいた。

次に感想を紹介する。感想として多く挙がって来たものは新型コロナウイルス感染症の影響で思うように活動が進まず難しかったといった内容のものであった。確かに例年とは異なる状況でかなりの制限が強いられたことは事実である。しかし、自分達で考え、この制限された状況下でできる最大限のことができたのではないかとも考えている。また、南相馬の住民の方々に話を聞いたり、触れ合ったりするうちに市民の南相馬への愛と自分たちがどうにかしなくてはいけないという強い責任感を感じたという声も聞かれた。被災地というどうしてもマイナスに聞こえてしまう地に生きる人々のプラスの声を聞き、その熱を肌で感じることを経験できたことは貴重な経験であるし、今後この経験をした学生達が日本中、世界中にその想いを伝えることで本当の意味での復興というものに繋がるのではないかと考える。



↑住民の方にインタビューをして記念撮影をしている様子

6.　活動方法についての反省点

活動方法についての反省点としては、大きく分けて２つのことが挙げられる。１つ目は、新型コロナウイルス感染症という予測が難しい感染症の流行によって、２つの活動どちらも当初予定していた活動をすべて終えることができなかったという点である。半ば仕方のない点もあるが、ある程度の予想は立ったはずであり、すべての活動を終えることができなかったことは反省すべき点であると考える。この経験を来年度以降の活動に活かしていきたいと思う。２つ目としては、コミュニティーの再建というテーマについてあまり寄与できなかった点である。当初コミュニティーの再建というテーマについて扱おうとしていたが、事業の変更などによってコミュニティー再建という分野にはあまり触れることが出来なかった。課題としてコミュニティー再建に関する問題は未だ残っているため、来年度以降の活動で扱いたいと考えている。

7.　終わりに

震災から 10 年が経ち、節目の年だと世間やマスコミで騒がれている。このことをどう捉えるかは自由であるが、南相馬市の現状を見て住民の方々の話を聞いてきた身としては復興に節目などないのではないかと感じている。どんなに時が経っても震災の影響というものは消えないし、薄れることもない。しかし、それに対して人間の方が工夫を凝らしてどう対応するのかを模索し、前進し続けているから震災の影響が小さくなっているように感じるだけなのであると思う。その前進のためには、被災地の住民や行政機関の努力だけでは足りない。日本中の人々が、はたまた世界中の人々が南相馬や福島の現状を知り、正しい知識を備えた上でその前進の手助けをしなくてはならない。復興とは誰かがするものではなく、皆で創り上げるものなのである。皆がその前進に手を貸し、同じ方向を向いて進み始めたとき始めて本当の意味の復興というものが行われるのではないかと考える。その本当の意味での復興の一つのきっかけとして、今回のうんとイイトコ南相馬 Season 4 という活動が作用し、何らかの影響を与えることを願っている。

最後に、このような活動を行うことができたのは南相馬市と地域住民の協力があったからこそである。このような活動を可能にしてくださった南相馬市と地域住民の方々に感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。